

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(14):

海外出張に行くあなたは、「たった一人の軍隊」である

<http://eetimes.jp/ee/articles/1302/18/news010.html>

われわれ英語に愛されないエンジニアが海外に出張する上で、「最大の難所」とも言える場所——。それが入国審査です。今回の実践編(入国・出国)では、海外出張に行くあなたを「たった一人の軍隊」とみなし、敵国(=出張先)に首尾よく潜入(=入国)する方法についてお話ししましょう。入国審査で使える“レジユメ”も紹介します。

2013年02月18日 09時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

私が大学4年生の時の話です。私が所属していた大学の電気工学科において、求人倍率は200倍でした。

本当に厳しい時代だったので——企業側にとって。

この「200倍」とは、大学卒業予定者一人当たり、200社からの求人があったという意味です。当時の理系学生の就職状況は「モテモテ」なんて、甘っちょろいレベルではありませんでした。研究室はもちろん、下宿でも、企業からの執拗な勧誘の電話に悩まされていたというくらい、理系人材の凄まじい争奪戦が繰り広げられていたのです。

これは、1980年後半から1992年までの、いわゆる「バブル」といわれていた時代の、本当にあったお話です。

海外旅行中の日本女性にみた、“揺るぎなさ”

この時代に海外旅行ブームが到来し、日本人の多くが海外旅行に行くようになりました。

このブームが来る前は、海外に出掛けることは、1つのステータスシンボルでした。まず、英語が使えることという条件だけでなく、お金持ちであることが要求されたのです。なにしろ、米国往復の航空券だけで100~150万円かかり、1米ドルが360円に固定されていた時代です。今の感覚なら、ハンバーガ、シェーク、ポテトのセットで1200円くらいでしょうか。当時の「円」は、現代に比べると、めちゃくちゃに安かったのです。

その一方で、「アメション」という言葉がありました。これは、「アメリカへ小便をしに行った」という蔑称です。

戦後占領下の日本では代議士、芸能人といった著名人が箔(はく)をつけるため、続々と米国へ渡りました。帰国後、「米国へ行った」という、ただそれだけのことで「国際政治や国際文化などの事情通」のように振る舞う人に対して、最大級の皮肉とやゆを込めて使われました(前回の連載で、「インド一人旅」で箔を付けようとした私も似たようなものです)。

さて、話をバブルの頃の海外旅行の話に戻します。

何のテレビ番組だったか忘れましたが、入国審査の状況のシーンが映し出されていました。そこには、「渡航目的は?」「滞在期間は?」「滞在するホテルは?」といった、入国審査官が尋ねる英語の質問全てに答えなかった学生(女性のグループ)の映像が流れていました。この番組の趣旨は明快でした。世界中どこにでも日本人が出没し、そして、インターナショナルにトラブルを撒き散らしている、ということをお願いしたいものだったのでしょ。しかし、その時の私の感想はまったく違うものでした。



普通の人であれば、飛行機の中で入国審査に思いをはせて心配になり、一夜漬けならぬ、数時間漬けの「場当たり英語」を暗記しようとしてしまうものです。私などは、それでも足りず「場当たり現地語」まで練習しました。少なくとも、中国語、タイ語、ネパール語、ドイツ語の「こんにちは。よろしくお願ひします」は、入国審査までには確実に覚えたものです。

しかし彼女たちは違いました。「え〜、アタシ、分かんない」と言っていれば何とかなり、そして、事実100%なんとかなってきた、その日本独自の(バブル時代にのみ通用し、かつ彼女たちの年齢以外では使えない)コミュニケーション手法を、全く臆することなく、インターナショナルでも展開していたのです。

そして、彼女たちのスタンスは、海外にあってその国の入国に関する全権を付託されている役人の前においてすらも全く揺るぎがありませんでした。

——これこそが、真の漢(おとこ)である。

「私たちは、外貨(円)をあなたの国に落としに来た『上客』よ」という認識に基づけば、むしろ海外の審査官は「日本語で質問してくるべき」とも考えられます。

「お客様は神様です」という日本独自の価値観を、そのままストレートに外国においても展開するその彼女たちは、真に賞賛に値します。この彼女たちの価値観こそが、グローバル化で完璧に出遅れている、我が国の最後の希望ではないか、とすら思えてくるのです。「英語に愛されないエンジニア」の一人としては。

たった一人の戦争

こんにちは、江端智一です。今回は、入国編になります。

まず、本論に入る前に、海外出張における「入国手続き」の持つ意味について考えてみたいと思います。これらは、単なる「審査」ではありません。もっと重要な意味があります。

そもそも海外出張とは、あなたの勤務先の会社が「もうける」ために行われるものです。ですから、当然あなたは、その海外出張の経費を越える利益を生み出すことが期待されているわけです。つまりあなたは、自分の会社に利益を導く為に海外の会社と「交渉」しに行く、という良いでしょう。

国家間の交渉——つまり「外交」においては、軍事力、経済力、法律、政治力、国際世論、他国との友好関係等の、各種のカードを切りながら行われます。



写真はイメージです

しかし、海外の会社との「交渉」という名の「外交」において、エンジニア同士で行うミーティングの切り札は「あなた自身」です。あなたの技術力、経験、見識、洞察力、そして発想力などが「切り札」になります。あなたは、「あなたが持っている武器」で外交を行うわけです。

「単なる外交」ではなく「武器を伴う外交」となれば、これはクラウゼヴィッツの『戦争論』における超有名フレーズ「戦争とは、政治とは異なる手段を以って行う(外交)政治の継続である」

を引用するまでもなく、簡単に次のような結論に帰着します。

——海外出張とは、単身で武器を持って乗り込む外交、つまり「たった一人の戦争」である

戦争は、勝ってなんぼの世界。戦争に勝つためには、当然、戦略と戦術を案出し、実際の戦闘を行う必要があります。

しかし、これが全てではありません。重要なのは、「兵站(へいたん)」です。兵站とは、簡単にいうと、戦争で実際に戦う部隊を支援する活動です。具体的には兵士の移動(輸送)や衛生状態の維持、物資の配給や整備、施設の構築や維持など、要は実戦以外の全てのことが含まれます。

あなたは、「たった一人の戦争」を遂行すべく戦略の立案を行う将官であり、戦術を指揮する指揮官であり、戦闘を行う兵士であり、そして同時に、戦地に兵士を安全に送り込み、十分な食料と飲料水を準備し、戦線を維持する為の拠点建設を行う、兵站工兵でもあるのです。

つまりあなたは、

——たった一人の軍隊

と定義されるわけです。

今回は、「たった一人の軍隊」の「兵站」という観点から、「入国」を捉えてみます。

すなわち、「入国」を、

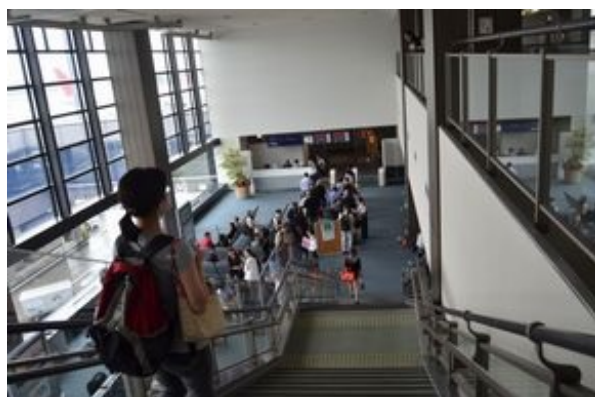
1. 兵士(あなた)の戦場への輸送(敵拠点国への潜入)
2. 戦略物資(プレゼンテーション資料、設計資料、サンプルプロトタイプ)の運搬

と位置付けて、私の体験談を交えつつお話します。では始めます。

入国審査=最初の関門

飛行機が目的の空港に到着すると、真っ先に入国審査のゲートに向かわなければなりません。入国審査とは、海外出張先の国に入国する際に行われる審査のことで、この審査をパスしなければ、いかなる者も入国できません。

入国審査はその国の方針に沿って行われるものですから、その国がどんなルールを定めようとも、それに従う必要があります。例えば、(国際協定などの問題を無視するのであれば)「お前の顔が気に入らん」という理由で入国を拒否される可能性だってあるわけです。



写真はイメージです

しかし、そんな審査のルールなんぞはどうでもよいのです。入国審査とは、海外出張を命じられた「英語に愛されないエンジニア」である私にとって、海外出張において最初に直面する最も現実的な問題——たった一人で審査官の査問を受けなければならないというドラマチックな場面——なのです。

もっとも、旅行の目的が観光であれば、当然審査が甘くなるのは冒頭で説明した通りです。一方、われわれのようなビジネスパーソンはそんなわけには参りません。

かなり掘り葉掘り聞かれることを覚悟し、それに対応しなければならないのです。当然、英語で。

先ほどの「兵站」の話でいえば、「たった一人の軍隊」が敵国に潜入する第一歩が入国審査ですが、この潜入の失敗例は枚挙にいとまがありません。いくつか挙げてみましょう。

- 私の直前に並んでいた同僚は、入国審査官の質問に対して左右に首をかしげていました。3分も経過した頃に、審査官が疲れた声で“Please, Japanese translator at the gate 13”、とアナウンスし、その後、そのまま別のカウンターに連行されました。
- 「入国の時に手荷物をチェックされた同僚が、常備薬の入った袋の説明を求められて『ドラッグ(「麻薬」という意味もある)』と言い、そのまま空港警察官に拉致されて視界から消えた」、という話も聞いたことがあります。

一般的に、海外出張をするようなビジネスパーソンは、どの国の入国審査においても「英語を普通に使いこなすことができる」とみなされており、さらに遺憾なことには、これは国際的な常識のようです。

なぜなら、入国審査でもめ事になってしまったビジネスパーソンは、私が見てきた限り「英語に愛されない日本人」だけだったからです。

入国審査を突破する秘策

さて、[連載第10回](#)で紹介した筆者のロンドン出張は、それはもうトラブルのてんこ盛りだったわけですが、この入国審査でも、審査官と面倒なことになりました。

——入国の目的は何ですか
ビジネス(仕事)です。

——何の仕事ですか
交通システムの設計の仕事です。

——何のためにこの国に来たのですか？
交通システムの設計の打ち合わせのためです。

ここで審査官が、困ったという顔をして質問を続けました。

——誰のためにこの国に来たのですか？
我が社のためです。

(いや、そうじゃなくて……という表情)——この国の誰の利益のためにこの国に来たのですか？
我が社の欧州部門の利益のためですけど？

という質問を何度か繰り返しているうちに、審査官が諦めたように入国スタンプを押して、放り投げるようにパスポートを私に返しました。

「変な審査官だな」と首をかしげながら、いろいろ考え込んでいましたが、その後、電車でロンドン郊外へ移動している最中に自分のミスに気がつきました。

私は、「この国の誰の利益のために、この国に来たのですか？」の質問の意味を取り違えていたのです。審査官の興味は、あくまで「自国の利益」なのです。私の会社の利益がどうなるかが、それはどうでも良いことなのです。彼(審査官)が知りたかったのは、



写真はイメージです

- 我が国のどの交通システムに係わる業務であって、
- 我が国のどの会社と協業して、
- どのような利益を我が国に与えてくれるか

ということだったのです。

ということは、入国審査で業務の内容を聞かれた場合、「入国する国の利益」をスラスラと言えなければいけないのです。しかし、このような説明を短時間かつ簡潔にできる人を、「英語に愛されないエンジニア」とは呼びません。であれば、やはり、あらかじめ準備しておくことが望まれるわけです。

そこで、私が提案したいことは、入国審査用のレジュメの作成です。このレジュメを、ばん!と、パスポートと一緒に最初に審査官の目の前にたたきつけてやってください(もっとも、さらに詳細な質問をされてしまう、というリスクもありますが)。

本レジュメの目的は3つです。

- (1)「あなた(審査官)に何も隠しだてするつもりはない」という潔さとオープンマインドの表明
- (2)「ここに書かれている以上のことは話せない」という暗黙的な守秘義務の主張

そして、ここが大切ですが、

- (3)「私に英語で質問しても、時間の無駄だ」という認識の共有化

となります。

簡単なレジュメのサンプルを付録として載せておきますので、必要に応じてご利用ください。

次なる難所は、税関

大抵の場合、この入国審査を通過すれば「勝った」と思ってしまうものです。ただし、本当にレアケースではあるのですが、ここで油断すると、ひどい目に遭うことがあります。

税関手続きです。

エンジニアの出張であれば、外国の展示会や打ち合わせに必要な道具(計測機器)、製品、または製品のプロトタイプを持ち込むことが少なくないと思います。

このような場合、(1)日本から出国、(2)外国に出国、(3)外国から出国、(4)日本に再入国の、合計4回の通関手続きが必要です。もちろん、税関の対象とならないモノであれば、別に何もしなくても違法ではありません。いらんことを申告せずに、とっとと空港から脱出するのが正解です。ですが、税関の役人はプロです。彼らは、「面倒に巻き込まれたくないな」と考えるわれわれの表情を読みとることにかけては、超一流です。



写真はイメージです

私が学生の頃、まだインターネットは存在せず、また今のレベルほどに、性表現が開放的でなかった時代、海外の「主に性的な娯楽要素を扱う分野の書籍および雑誌(「エロ本」ともいう)」は非常に希少価値を持っており、アホな男子学生の間では、売り手市場の取引が簡単に成立したものです。

昔から、体を張って実験することを常としていた私は、学生時代の海外旅行において、この「主に性的な娯楽要素を扱う分野の書籍および雑誌」を1冊のみに限定した密輸を、実験的に「隔回ごと」に実施していました。

そして、その場合に、私が成田空港の税関で荷物チェックを受けるヒット率は100%でした。これは「脅威の検出率」とも、または私が簡単に表情を読まれてしまう「大根役者」であるとも解釈できます。

いずれにしても、幸いなことに、これまで発見→没収に至ったことはありません。私も素人なりの工夫をこらしていたのです。ただし、スーツケースの荷物を全てぶちまけなければならない場所に隠す程度の浅知恵でしたが。

それはさておき。

海外においても同様です。「面倒に巻き込まれたくないな」というわれわれの表情を、税関の役人は簡単に見破ります。スーツケースを開けさせ、適法なプロトタイプ製品を発見し、そして、問います。

——「これは、何だ?」と。

パンフレットを何通送っても、メールを何十回送っても、全然分かってもらえない顧客に、その『『これは何だ』を説明するため』に、私たちは泣く泣く異国の地まで来たのです。それを、その分野においては完全に素人の税関の役人に、今ここで説明しろと? 「もう勘弁してくれよ」と、血の涙を流しながら、その場に崩れ落ちそうになります。

その質問の内容が、これまたすごい。

- これは、我が国の基準を超える、必要以上に強い暗号プログラムが使われていないか
- これは、軍事転用が可能な技術が含まれていないか
- 我が国の反体制勢力の手にこれが渡った場合、テロに使われる可能性はないのか

——そ・ん・な・こ・と、私・の・知・っ・た・こ・と・かっ!

と思っても、口に出してはいけません。役人を怒らせると面倒だからです。

もちろん、あなたが適法な製品を輸入しているのは、その役人も薄々分かってはいます。日本人は、国際法を順守することにかけては“世界的優等生”ですしね。それと同時に、日本人は、外国人の前では、とつても卑屈になることも、国際的に知られています。彼らの職務実績に貢献するために、われわれ「英語に愛されないエンジニア」などは、鴨がネギをしょって、加えてコンロと鉄鍋まで持参してくるくらい、ありがたいお客さんでもあるのです。

税関で使える「水戸黄門の印籠」がある!

さて、「これは何だ」という質問に対しては、入国審査と同様に、説明書を準備しておいて「これを読め」と対応するのが正解ですが、もう1つ、制度面からお勧めできるアプローチがあります。

「ATAカルネ」の利用です。

一般的な通関手続きを、もう一度おさらいします。

輸入においては、

(Step.1) 申告書その他の通関書類を提出するとともに、輸入しようとする物品を見せてチェックを受ける。

(Step.2) 輸入税(関税、物品税など)を支払い、輸入の許可をもらう。

となり、輸出においても、Step.1と同じような手続が必要となり、往復で合計4回必要であるお話をしました。仮にあなたが、複数の国を回る場合を想定して下さい。この手続きの回数を考えるだけでもゾッとします。

「ATAカルネ」は、これらの輸出、輸入、再輸出、再輸入の通関手続き全てで使うことのできる、「水戸黄門の印籠」のような効力を発揮する書類です。正式名称は「物品の一時輸入のための通関手帳」といい、「ATA条約」という多国間の国際条約に基づいて、締約国税関において正式な通関用書類として認められているものです。

「ATAカルネ」は2つの働きをします。

第一に、輸出入の申告に当たって税関に提出する書類としての役目です。通関手続きにおい

て税関に提出する特別の用紙がパックされており、必要な事項を記載して、税関に提出すると、税関が記載事項と物品の内容をチェックするだけで手続きが完了します。

第二に、ATAカルネは、外国への輸入通関手続きの際に、輸入税の担保書類になります。万が一にもないと思いますが、顧客が「そのプロトタイプ、研究目的で持っていたいので、それをここに置いていけ」などとむちゃを言い出した場合に、輸入税を支払う旨の誓約書の役割を持っています。

面倒を省いて乱暴に説明すると、ATAカルネとは、

「オメーらが気にしている面倒ごとは、全部日本国内で白黒ハッキリさせてきているからよー、とっとと、そこを退きやがれ」

を実現する書類、とっていただければ結構です。

ただし、ATAカルネといえども、各税関でのフリーパスを保証する万能の書類ではありません。テレビドラマ「水戸黄門」を見たことがない若者に印籠を見せても無意味なように、ATAカルネを理解していない役人には、別段何の効力も発揮しないのです。「面倒に巻き込まれる時は、何をしても巻き込まれる」とっておいて下さい。

入国で重要なことは、どんな手段を用いようとも入国を果たすことです。どのような不愉快なことがあろうとも、あなたは、自分の会社の利益のために派兵された「たった一人の軍隊」なのですから。

まあ、ともあれ、入国審査を通過し、製品のプロトタイプを入れたスーツケースがバゲッジクレームから出てきて、荷物を確保できれば、「戦略物資とともに、敵国への上陸に成功した」ことになります。

□

では、今回の内容をまとめます。

海外出張での打ち合わせを、「たった一人の軍隊」による「たった一人の戦争」と位置付け、「入国」を、敵の所在する国への潜入とみなせば、その目的は

1. 兵士(あなた)の戦場への輸送(敵拠点への潜入)
2. 戦略物資(プレゼンテーション資料、設計資料、サンプルプロトタイプ)の運搬

を、トラブルなく実施することです。

その手段としては、事前に

- 説明用の資料(レジュメ)
- ATAカルネ

を作成して、潜入時の入国審査官と税関職員の迎撃に備える、ということになります。

□

今回は、「ホテル編」に入ります。「ホテル編」では、ホテルを、戦闘の準備と支援を行う兵站拠点とみなして、「戦闘」そのものではなく、「戦闘準備」にリソースの9割を投入する「兵站主導型」の闘い方について説明します。

(付録1) 入国審査官対応レジュメサンプル

Mr/Ms. Judge of the Great Britain immigration office. (←入国する国名に変えて)
I have to apologize to you that I am not good at using English.
I asked my colleague to write this support letter that may include what you would like to know about me. I hope this letter will be helpful.

1. Name: Tomoichi Ebata

2. Age: 47 years old

3. Nationality: Japan

4. Address: Kamigyō-ku Kyoto Goshō Kyoto city

5. Passport Number: TK0123456

6. Purpose of the trip: Meeting at ABC Company limited as a system engineer about the local transportation signaling system in London in order to resolve chronic traffic jam (文章としての体裁はどうでもよく、必要な単語が出そろっていれば足る。すでに公開済みで秘密になっていない図面であれば、添付してもよい)

7. Period of the trip: 3 days

8. Stay of the trip: Feb. 21st -24th Hotel London (+44 (0)20 7777 7777)

9. Others: If you have any question about me, please call the following number, my boss "Ichiro Yamada" will take your call.

+81-45-123-4567 (大丈夫です。審査官は電話なんかしません(面倒だから)。)

10. My signature (以下に手書きのサインを入れる)

Thank you for your kindness.

参考文献「[サンフランシスコ国際空港\(SFO\)の越え方](#)」

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから

、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

